

日本口蓋裂学会

認定師 重点症例記録用紙

2025年度審査用

申請者氏名：

所 属：

主たる担当症例 a

治療経過記録簿

記録簿は要点を簡潔に記載する

裂型 左側唇顎口蓋裂

主訴 今後の歯並びが心配

現病歴 ○〇大学形成外科において生後3か月時に小三角弁法を用いて口唇形成、生後1年3か月でファーロー変法による口蓋形成術を受けた。○〇大学耳鼻咽喉科での言語聴覚検査で鼻咽腔閉鎖機能は良好で、構音障害もないとの診断であった。

顔貌所見 正貌は鼻の変形は認められるがほぼ左右対称であった。側貌ではストレートタイプであった。

正面・側面頭部エックス線規格写真所見 SNA79° で上顎の顎発育に問題は認められなかった。SNBは74° であった。ANBは5° で骨格性Ⅰ級であった。

パノラマX線写真およびデンタルX線写真所見 上顎左側切歯は矮小歯であった。左側中切歯と側切歯間に顎裂が存在していた。

模型所見 左側中切歯は捻転し切端咬合となっていた。上顎歯列に狭窄は認められず、側方歯部にクロスバイトは認められなかった。

機能系所見他、その他特記すべき所見 鼻咽腔閉鎖機能良好で構音障害も認められない。

診断名（第一期治療） 上顎左側中切歯先捻転を伴う左側唇顎口蓋裂切端咬合症例

治療方針（第一期治療） 上顎歯列弓形態が良好のため現状で顎裂部二次骨移植を行う。その後切歯の萌出完了を待ちセクショナルアーチで切歯の配列を行う。

治療経過概要（第一期治療） 6歳7か月：○〇大学形成外科にて顎裂部二次骨移植を行った。7歳3か月：右側中切歯が萌出開始。10歳1か月：リンガルアーチを用いて中切歯捻転の治療開始。10歳6か月：セクショナルアーチ開始。12歳0か月：ブラケット撤去、可撤式保定装置を用いて保定開始。

治療結果概要（第一期治療） 下顎の成長によりANBは2° となった。左側中切歯の捻転は解消し被蓋も改善した。顎裂部には矮小側切歯を配列している。本人は下唇の突出を気にしているが、母親は治療結果に満足している。

他分野（外科・言語など）との連携状況概要 複雑な家庭環境であることから骨移植時期に関して形成外科と協議し、動的矯正治療開始時期なども考慮して決定した。言語に関しては大きな問題が認められないとの報告があり、リンガルアーチなどの口蓋側の固定装置も自由に選択可能であった。

記入するスペースが不足する場合には適宜頁を追加し、記入してください。

症例写真記録簿

受付No. (未記入) _____

重点症例 1

申請者名 山○ 太○

第一期治療開始時 (6歳1か月)

印刷して画質を確認の上
提出して下さい



個人情報保護のため目隠しは大きくする

第一期治療開始時

注) アイマスク添付



第一期治療終了時 (12歳0か月)



第一期治療終了時



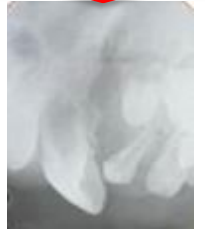
重点症例 1

申請者名 山○ 太○

デンタルやオクルーザル
は別紙でもOK

顎裂部が鮮明でない場合はデン
タルやオクルーザルを追加提出

第一期治療開始時デンタルエックス線写真



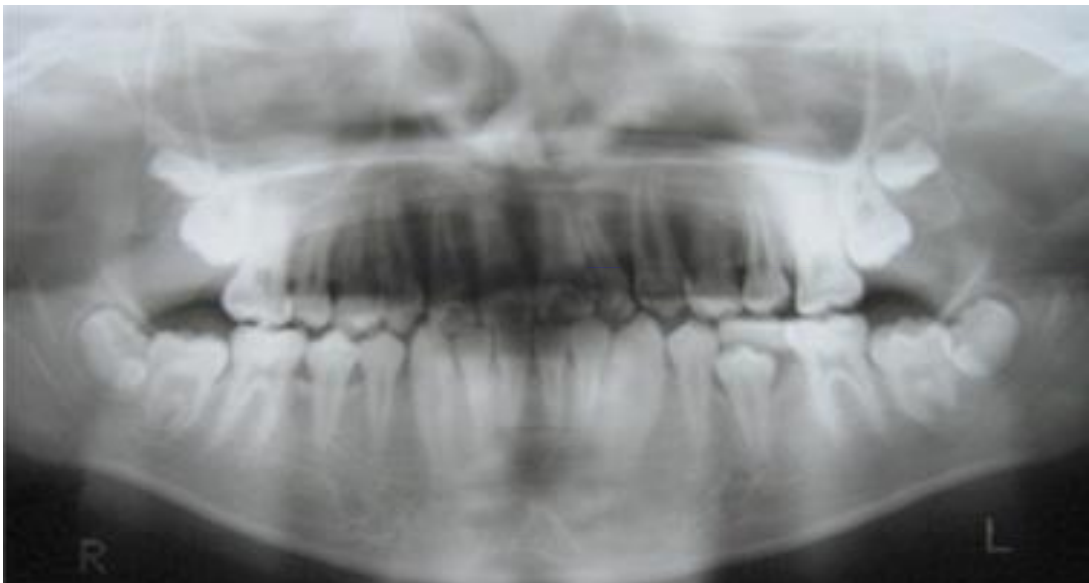
第一期治療開始時パノラマエックス線写真 (6歳1か月)



第一期治療終了時デンタルエックス線写真



第一期治療終了時パノラマエックス線写真 (12歳0か月)



主たる担当症例 b

治療経過記録簿

記録簿は要点を簡潔に記載する

・ 裂型 右側唇顎口蓋裂

・ 主訴 反対のかみ合わせを治療したい

・ 現病歴 〇〇大学形成外科において、生後4か月時に小三角弁法を用いて口唇形成生後、1年7か月時に粘膜移植粘膜弁法を用いて口蓋形成術を行った。7歳8か月時に第一期治療開始。上顎歯列拡大後、8歳5か月時に顎裂部二次骨移植を行った。セクショナルアーチを用いて前歯のアライメントを行い、13歳5か月時に装置を撤去し、可撤式保定装置を用い保定に移行した。1年間保定装置を使用。その後保定装置なしで経過観察。

・ 顔貌所見 正貌では下顎がわずかに右方偏位している。側貌はストレートタイプ。下口唇の突出が認められる。

・ 正面・側面頭部エックス線規格写真所見 骨格系：水平的にはSNAが 79.5° 、SNB 79.5° 、ANBは 0° と骨格的にはⅢ級を呈していた。垂直的には下顎下縁平面はFMAが 28.0° 、SN-MPが 34.0° とローアングル傾向であった。上顎前歯はU1 to FHは 117.0° でU1 to SNは 111.0° となっており唇側傾斜、下顎前歯はIMPA 104.5° FMIA 47.5° と唇側傾斜していた。結果としてinterincisal angleは 111.0° と-1SDを超えて小さな値を示していた。軟組織ではE-Lineに対して、上唇は4.0mm後退、下唇は1.5mm突出していた。

・ 模型所見 上顎歯列は放物線型だが、上顎右側第二大臼歯、左側第一大臼歯が口蓋側転位していた。上顎歯列弓幅径は44.9mmと標準であり、basal arch widthも50.1mmと標準であった。歯の大きさは矮小の右側側切歯以外は標準範囲内であった。上顎右側第二大臼歯から左側側切歯まではクロスバイトとなっており、上顎左側第一大臼歯もクロスバイトであった。

・ 診断名（第二期治療）骨格性Ⅲ級・アングルⅢ級反対咬合症例

・ 治療方針（第二期治療）上顎はポータータイプを用いて拡大しながら抜歯前にマルチブラケット装置でレベリングを開始し、下顎は両側第一小臼歯を抜歯して被蓋を改善した後に上顎の右側側切歯、左側第二小臼歯を抜歯してスペース閉鎖することとした。

・ 治療経過概要（第二期治療）15歳9か月：ポータータイプ拡大装置セット（8か月）。15歳11か月：上顎ブラケット装着・レベリング開始・下顎両側第一小臼歯抜歯依頼。16歳1か月：下顎ブラケット装着・レベリング開始。16歳8か月：下顎0.017×0.025インチSSワイヤーにBull loopを付与し、前歯の後方移動開始（Ⅲ級ゴム併用）。17歳1か月：被蓋が改善したため、上顎右側側切歯・左側第二小臼歯抜歯依頼。17歳3か月：上顎0.016×0.022インチSSワイヤーを用いて左側犬歯・第一小臼歯遠心移動。17歳11か月：上顎0.017×0.025インチSSワイヤーを用いて残存スペース閉鎖（Ⅲ級ゴム併用）。18歳7か月：上下顎0.019×0.025インチSSワイヤーにて細部調整。19歳3か月：ブラケット撤去・可撤式保定装置セット。

治療経過記録簿

- ・ **治療結果概要（第二期治療）** 前歯部の反対咬合が改善され、個性正常咬合が獲得された。上顎前歯はU1 to SNが 111° から 108° 、U1 to A-Pogが8.5mmから6.0mmと舌側傾斜し後方移動した。下顎前歯はIMPAが 104.5° から 89.0° 、L1 to A-Pogが10.5mmから3.5mmと舌側傾斜および後方移動した。結果としてinterincisal angleは 129.0° と標準的な値となった。上下顎前歯正中はほぼ一致した。右側の側方歯のクロスバイトは改善し、左側の第一大臼歯のクロスバイトも改善した。しかし、左側第一大臼歯の咬合は緊密さに欠ける状態であった。骨格的には下顎の前方成長によりANBが -1.5° となった。上下顎前歯の後方移動によりE-lineに対し下唇は1.5mmから-3.0mmとなり、下口唇の突出感が改善され良好な側貌が得られた。本人の顔貌に対する満足感が高かった。
- ・ **他分野（外科・言語など）との連携状況概要** 18歳10か月に〇〇大学形成外科にて鼻口唇修正術を受けた。

症例写真記録簿

受付No. (未記入) _____

重点症例 2

申請者名 山○太○

第二期治療開始時 (16歳9か月)

印刷して画質を確認の上
提出して下さい



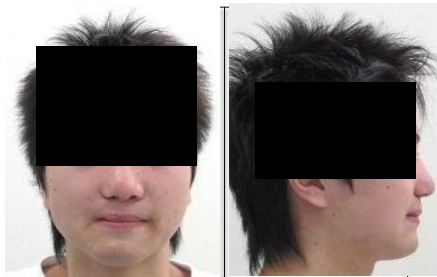
個人情報保護のため目隠しは大きくする

第二期治療開始時

注) アイマスク添付



第二期治療終了後 (19歳3か月)



第二期治療終了後



重点症例 2

申請者名 山〇太〇

デンタルやオクルーザル
は別紙でもOK

顎裂部が鮮明でない場合はデン
タルやオクルーザルを追加提出

第二期治療開始時デンタルエックス線写真

第二期治療開始時パノラマエックス線写真 (16歳9か月)



第二期治療終了時デンタルエックス線写真

第二期治療終了時パノラマエックス線写真 (19歳3か月)



側面セファログラムトレース

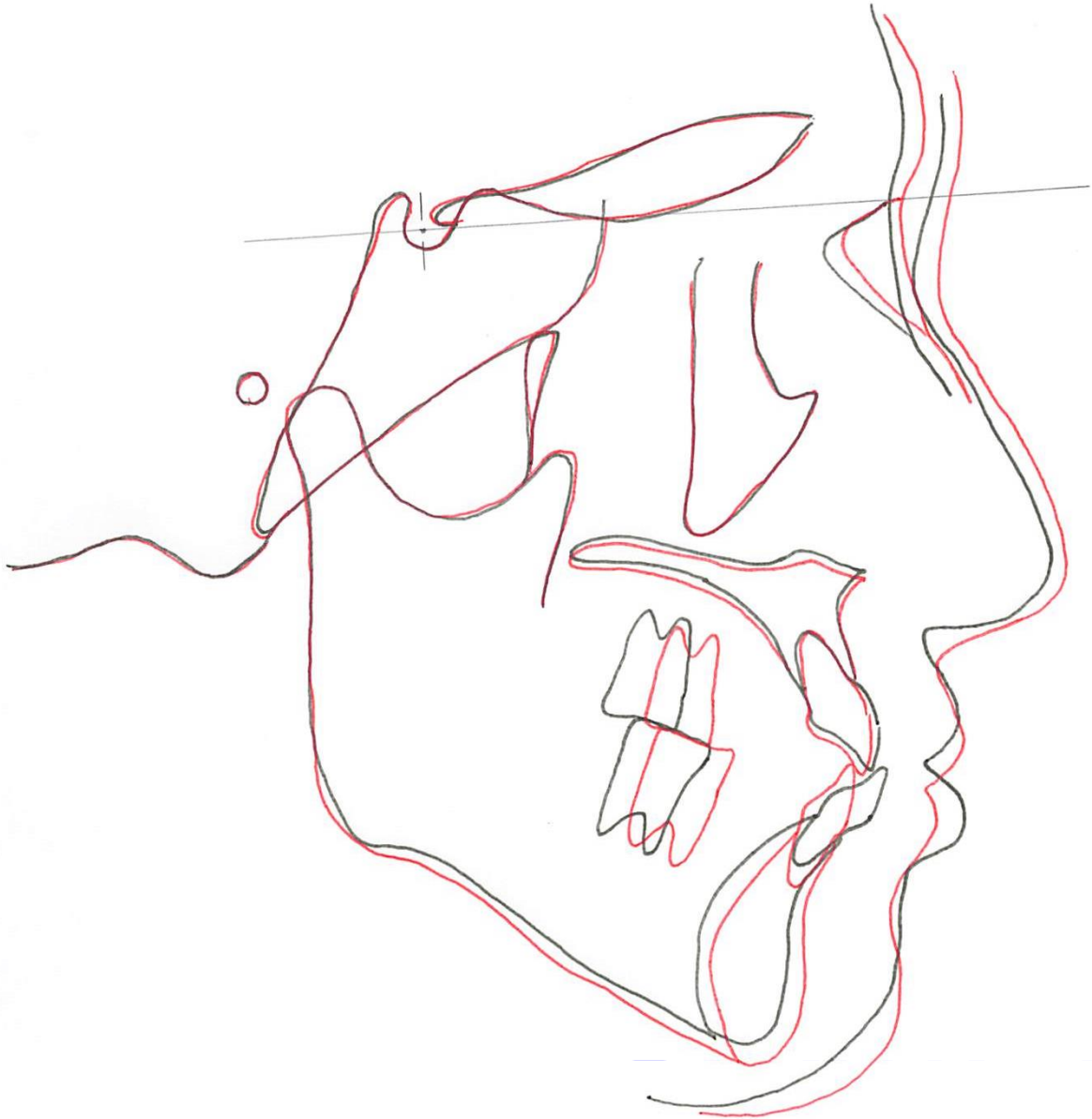
※原寸大のトレースを記入してください。

第二期治療開始時（黒） - 第二期治療終了時（赤） 重ね合わせ

全体重ね合わせ

SN at S

トレースは手書き



—————

16歳 9か月

—————

19歳 3か月

次のページに2022年
からの追加資料あり

重点症例 2

申請者名 山○太○

側面セファログラムトレース

※原寸大のトレースを記入してください。

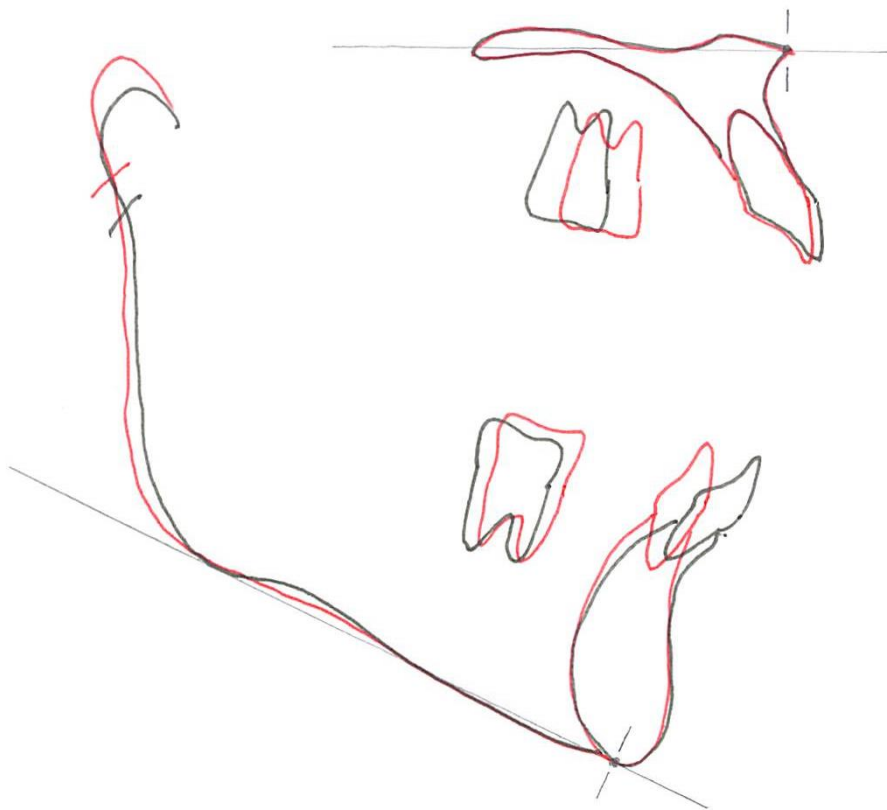
第二期治療開始時（黒） - 第二期治療終了時（赤） 重ね合わせ

上下顎重ね合わせ

2022年より追加

上顎重ね合わせ

Mand. plane at Me.



Mand. plane at Me.

下顎重ね合わせ

16歳 9か月

19歳 3か月